

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 163 号

平成 28 年 6 月 15 日

編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課



「KOTE'S CAFE」

(写真撮影：学生支援課)

平成27年度学位記授与式 学長告辞…………… 2	平成27年度 学位記授与式……………16
卒業にあたって……………緒方 美季…………… 5	学業成績優秀者に対する学生表彰を行いました……………17
卒業にあたって……………熊倉 隼…………… 5	卒業生の動向(医学科)……………18
卒業にあたって……………佐久間寛史…………… 6	卒業生の動向(看護学科)……………19
青春時代……………傳田 侑也…………… 6	課外活動に対する学生表彰を行いました……………20
卒業にあたって……………飛澤 悠伊…………… 7	模擬患者を自学養成しています……………21
大学生活で重要なこと……………竹内 悠仁…………… 7	安否確認システムへの登録について……………21
卒業にあたって……………垣野 純輝…………… 8	夏季休業中における事故防止について……………22
卒業にあたって……………境 綾乃…………… 8	各種保険について……………23
卒業にあたって……………佐藤 美幸…………… 9	課外活動物品の貸出について……………23
卒業にあたって……………楯 尚子…………… 9	保健管理センターの開所時間・健康相談日 ……24
糖尿病学と共に歩んだ40年…羽田 勝計……………10	教員の異動……………25
定年退職にあたって……………松田 光悦……………11	今後のスケジュール……………26
定年退職にあたって……………岡田 洋子……………13	「学生の学習・生活実態調査」結果について ……26
平成27年度定年退職教授による ……………最終講義が行われました……………14	



平成27年度学位記授与式 学長告辞

旭川医科大学 学長 吉田 晃 敏

本日、三つの学位記授与式を挙行し、それぞれの学位記を取得された皆さんと感動を共有出来ましたことを大変嬉しく思います。

始めに、医学科第三十八期生128名の皆さん、並びに看護学科第十七期生60名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんを今日まで育てて来られたご家族の皆様のご感慨もひとしおと思い、重ねてお祝いを申し上げます。学年担任を始め教職に当たられた先生方、そして学生諸君といつも接してきた事務職員の方々も本当にお疲れ様でした。

また、看護学修士の学位を取得された10名の皆さん、医学博士の学位を取得された13名の皆さん、心からお祝いを申し上げます。

共同研究者と苦勞を共にした努力と、その結果生まれた皆さんの優れた研究業績に対し、深く敬意を表します。皆さんがこの誇りある学位を次の大きなステップにつなぎ世界に発信する、より高いレベルの医療人・研究者へと成長することを強く期待しております。

さて、皆さんを含め本学での医学部卒業生は、医学科で3,905名、看護学科で1,145名になり、二つの学科を合わせると5,000名を超えました。また、博士の学位取得者は948名、修士の学位取得者は162名となり、博士・修士の取得者は1,100名を超えました。

皆さんの先輩達は、全国の医療現場を始め研究機関や行政機関、そして海外の医療拠点などで活躍し、それぞれ高い評価を受けております。

後に続く皆さん達は自分自身の努力を称え、自信を持って明日からの新たな第一歩を踏み出して下さい。

幸せなことに今私たちの国・日本は本当に平和です。しかし目を世界へと転じてみれば、人類は今まさに大きな荒波に揉まれています。テロが頻発し、紛争地帯を脱出した難民がヨーロッパ各国に押し寄せています。科学技術の進歩で世界はますます賢くそして豊かになっているはずですが、実は世界の富豪62人が持つ富が世界人口の半分、35億人がもつ富をも上回っているという驚くべき格差社会が進行しています。

一方で、戦後70年以上戦争を知らずに過ごしてきた私たちの国、日本で進行しているのが、世界一のスピードで進んできた「超高齢化」です。すでに国民の4人に1人が65歳以上になっています。国の推計では、2040年にはここ北海道では、道民の4割が高齢者になるという衝撃的な数字も出ています。

国は「スマートプラチナ社会」の実現に向けて、ICTが持つ「ネットワーク力」を活用し、全ての世代がいきいきと活動できる明るい「超高齢社会」を目指すとしています。しかし、技術力でフォローできることは限られています。カギを握っているのは、ここにいる皆さんたち若い力です。皆さんはその若さに加えて、医療人として貢献できるパスポートを手にしていきます。その重みと責任を、改めて実感して下さい。

政府は先月、環太平洋パートナーシップ協定

(TPP)に署名しました。実は医療においても、TPPは無関係ではありません。公的医療制度の自由化については結局TPPの協定内容から外れましたが、海外の新薬が国内で承認されるまでに時間がかかる「ドラッグラグ」の問題などが海外から指摘されていたこともあって、国は、患者からの申出を起点とする保険外併用の仕組として「患者申出療養制度」を新設するなど、医療をめぐる状況も大きく変化しようとしています。

がん遺伝子診断など保険適用にならない治療法も、患者のニーズに押される形で広がり始める中、持てる者と持たざる者との格差も徐々に広がりはじめました。

難しい問題です。「医療」はどうあるべきなのか。

一昨年6月の北海道の調査によりますと、「道内で不足している医師の数」は1,144名で、4年前の不足数とほぼ同数でした。北海道では毎年300名を超える医師が誕生しているにもかかわらず、医師不足は解消していません。

一方、看護師不足もまた深刻です。国が看護体制を見直したことでニーズが一気に高まり、もはや慢性的とも言える看護師不足が全国で続いています。

これからの時代、少子高齢化・人口減少が進む中で、全国的には毎年、医師は8千人程度、看護師も5万人程度増加していますから、数の確保という面でいえば遠くない将来、医師不足・看護師不足は解消するでしょう。しかしながら、医師や看護師の「数」がいくら増えても、「医療格差」の問題は簡単には解消しません。地球全体の富が増えても貧富の格差が逆に拡大している現代と同じように、医師や看護師の数だけ増えても、結局は医療格差が広がるだけの結果に陥りかねません。求められているのは、医師・看護職者の「志」なのです。

私達の旭川医科大学は、正にその「志」……、地域医療に貢献せんとする「志」ある医師や看護職者を育てることを目的に生まれた大学です。そのために出来ることは何かを常に考えながら、私自身旭川医科大学の「改革」を進めてまいりました。

その一つが、北海道に根ざす医療人を育てる「地域枠」の導入です。平成20年度から医学科に地域枠を設け、その翌年の平成21年度から地域枠をさらに拡大し、本日の医学科卒業生の内94名、実に73%が道内出身者となっています。そして、今年の卒業生の中で、医学科は6割以上の方が北海道に残り、内41名がこの4月から本学病院に残る選択をしてくれました。これは、昨年度の31名を10名も上回る数です。看護学科を卒業する60名の内、63%の38名が本学病院に就職することになっています。

今日卒業された皆さんがこのように成長され、北海道に残る卒業生が増えたことは、大きな成果と考えています。この場にはもちろん、道外に出て医療に携わる仲間もたくさんいます。皆さんが第一歩を踏み出すその場所が、北海道であっても道外であっても、ここ旭川医科大学で皆さんが胸に刻んだその高い「志」だけは、忘れないで下さい。

私自身の医療格差解消への志の一つは、遠隔医療という形で一つの実を結びました。まだインターネットも広く普及していなかった時代から、私を一貫して支え続けたものは、必要な時に必要な医療を受けられる環境を創りたいという思いでした。私自身の志は、「総務大臣賞」、「文部科学大臣賞」を頂きましたが、医療格差が解消していない現状では、まだ「道半ば」だと思っています。

皆さんの「志」は、何でしょうか？

医学科、看護学科を卒業した皆さん、博士、修士の学位を手にした皆さん、新しい人生の第

一歩を踏み出す前に、もう一度今の自分自身の胸に、一人の医療人として、「自らの志」を問いかけて下さい。

さあ！医療・医学研究の最前線は、皆さんを心待ちにしています。

旭川医科大学に残ってくださる皆さんとは、これから新しいステージで、地域医療のため、そして高いレベルの研究を行うため、共に頑張っていきましょう。

大学を巣立つ皆さんは、本学の卒業生であること、学位を本学で取得したことを誇りに、各地で活躍されることを願っています。そして将来、更なる改革を成し遂げたこの母校で共に働ける日が来ることを、心から願っております。

ここ北海道では、明日、道民が夢を見続けた北海道新幹線がついに開業します。計画策定は昭和47年でした。そして翌年、昭和48年私たちの旭川医科大学が産声を上げたその年に、札幌・旭川間が計画に加わり、整備新幹線計画がスタートしました。

それから43年の時を経て、ついに新幹線が津軽海峡を越えてやってきます。もちろん、札幌までやってくるのは2030年。計画上でまだ残っている旭川まで果たして新幹線がやってくるのかは、誰もわかりません。

しかし私は、いつかきっと旭川まで新幹線がやってくると信じています。

夢は、みんなが語り続けていくことで、きっと実現します。

医療・医学も全く同じなのです。

皆さんの夢は、何でしょうか。

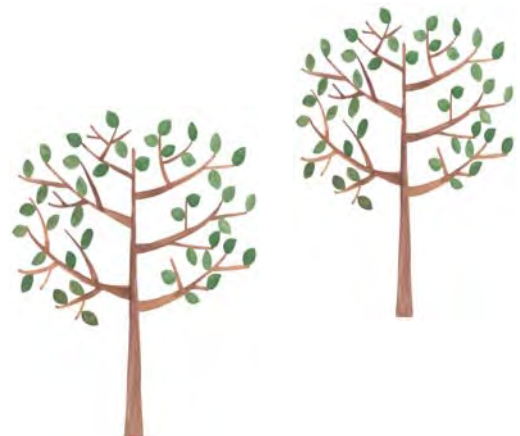
夢と希望を胸に旅立つ「志」ある若者達の、新たな挑戦・旅立ちに対して、心からの激励と賛辞を込めて、ここに学長の告辞といたします。

道に迷った時は、いつでも大学の門を叩いて下さい。

旭川医科大学は、いつまでも皆さんのための母校です。

卒業、学位記取得、おめでとう。

平成28年3月25日



卒業にあたって

医学科第38期卒業生 緒方美季



入学した当初、「ここから6年は長いな」と家族と笑い合っていたのも昨日のことのように思い出されますが、長い筈の6年間はあっという間に過ぎ去り、いよいよ医師として働き始める日が近づいてきました。

入学前は、「遊びは程々に！たくさん本を読んで勉強しよう」と考えていましたが、いざ大学生活を始めてみて、机の上で勉強するだけでは大学生活が勿体ないということに気がきました。医療従事者を目指す中にも様々な人がいて、沢山の成書を読み込んで多くの知識を学んでいる人、学年や職種問わず広い交友関係を築いて情報収集する人、海外の医療に目を向けて日本の医療体制を良くしようと活動する人など、人によって得手不得手はあるものの将来の自分や周囲のために皆が一生懸命に様々な方向から大学生活を過ごしていました。そんな人達を見て、自分も何かしなきゃと

いう漠然とした焦りが出てきたので、とりあえず1番の苦手を克服するためにこの6年間で色々旅をしてみました。私は年上の方と話すことが苦手でしたが、医療とは関係のない集まりに顔を出すことや、色々な土地のゲストハウスで父親ほど年齢が離れた人達と語り合ってきたことで、少なくとも6年前よりは人と会話できる社会人に近づけたのではないかと思います。他にも、生理学講座で研究させていただいた経験は、問題点や疑問点を持ちながら日々の勉強を積み重ねていくことに、部活での経験は、人間関係の構築や自身の心身を健康に保つことなどに生かしていき、巡り巡って最終的に患者さんや周囲の人々のためになればいいなと思います。このような多くのことを経験できた6年間はとても楽しく充実したものであったと思います。そんな学生生活を支えて下さった先生や職員の方々や、先輩や後輩、家族、そして一緒に過ごしてきたくれた同期の皆様から心から感謝します。ありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第38期卒業生 熊倉隼



突然の執筆依頼に驚きました。ですが私に白羽の矢が立ったからには、これまでの学生時代を文章にすることに何か意義があると思いい、この度は6年間で簡単に振り返ってみようと思います。

私は関東の人間で、北海道とは縁も無い凡庸な田舎少年でしたが、北海道の雄大な自然とその風土で育まれる生活に対して一定の憧憬があり、幸いにして進学先として旭川にて新生活を始めると至りました。

旭川とその近郊というのは実に気持ちの良い所で、街中から少し郊外に出るとすぐに自然を感じられる事がとても感動的でした。夏の余暇には部活としてゴルフに興じたり、冬は友人とスキーをしに雪山に通う等、数え切れないほどの道楽を尽くしているうちに、あっという間に6年が過ぎてしまいました。本当に6年というのは早いものです。

学外では春の長期休暇を利用して、海外へ単身旅行をすることもありました。旅先では歴史的な建物や名勝を訪れ、地元の食材に舌鼓を打ちながら人々との一期一会の刹那的な出会いを体

験しました。医学の勉強と併行して語学の勉強を地道に続けてきた事は旅行先の土地の表面的な解釈だけでなく歴史や背景を理解するのに非常に有効な手段となったと思っています。本学の英語科の先生方にはTOEFLやIELTSに関する指導、助言を頂き大変お世話になりました。感謝申し上げます。

この6年間で自分なりに様々なことに首を突っ込んで経験値を積むことで、多少なりとも色々な物事に対して寛容になれたような気がします。ともあれ入学した頃の自分よりも少しは視野が広がったかもしれません。

さて、楽しかった学生生活や辛かった国試の勉強も終わり、いよいよ4月から医師として社会に出ることになりました。医師という職業には多くの責任が伴います。ついに私たちも責任を担う立場となり、徐々に緊張感を感じてきています。これから臨床の現場で様々な事態に出会おうと思いますが、時に一緒に働く同期と助け合い、先生方と相談したりすることで重要な局面を乗り越え、問題を解決できればと考えています。

最後に6年間ご指導くださった先生方に心より感謝します。ありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第38期卒業生 佐久間 寛 史



ついに卒業を迎えることとなりました。この6年間はあっという間という感覚がある一方で、思った以上に長く険しい道のりであったなと感じることもあります。様々な体験や試練（主に試験）が僕の前に次々と

現れ、その度に真正面からぶつかっていきました。一つ一つは小さな障害ではあるものの、着実にこなしていくことが重要でありました。着実にこなし、乗り越え、自分の糧としていきました。この6年間はその繰り返しであったように思います。塵も積もれば山となる、という言葉がありますが、まさにその通りで、卒業を目標に、小さな塵を6年間かけて蓄え、今、山となったわけです。

そんな6年間で過ごす上で欠かせなかった存在が仲間でありました。勉強面では、試験期間に入る度に勉強会の場を設け、仲間と夜遅くまで勉強していました。医学部の勉強は、暗記量が膨大で大変ではありますが、仲間の存在のお

かげで乗り切ることができました。特に国家試験を控えた6年次は、精神的にも追い込まれる時期であり、仲間の支え合いが欠かせないものとなりました。この6年間でできた関係性は、社会人になっても大切にしていきたいです。

また、様々な課外活動を通して、仲間から多くの刺激を頂く機会を得ました。中でも、地域の小中高生に対して健康教育を行っている団体（Med-Edu）での活動は、僕自身に多大な影響を与えました。そこには、自身の確固たる意志を持つ仲間が集い、朝から晩まで授業作りに没頭する姿がありました。何十時間、何百時間とディスカッションを繰り返しました（圧倒的に勉強時間よりも多い…?）。授業作りに注ぐ情熱は尋常なものではなく、そんな団体に所属できたことを誇りに思っています。その時に共有した溢れんばかりのエネルギーは、これから先の僕自身の原動力になることは間違いありません。

最後に、6年間の学生生活を支えて下さった、すべての方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

青春時代

医学科第38期卒業生 傳 田 侑 也



日本には四季がある。夏の次には秋が来て、冬が来ればやがて春が訪れる。では、人の青春とはいつ訪れるのであろうか。ある人は高校時代の甘酸っぱい恋愛こそ青春であったという。

ある人は人生の最後に、のんびりと楽しむことが青春

だという。またある人は青春を味わったことがないという。

私の青春はいつかと問われたら、それは間違いなく大学生活だ。というのも、私の思う青春とは、乗り越えるべき己の未熟さ・青さの期間であるからだ。この6年、私は実に多くのことを経験し、失敗し、学んだ。初めての一人暮らしでは毎日ご飯を作り、洗濯、掃除をする大変さと母の偉大さを知った。初めてバイトをし、お金を稼ぐことの難しさ、人間関係のもどかしさ、父の偉大さを知った。初めて留年の危機を迎え、コツコツ勉強することの大切さを知った（結局毎年同じ過ちを繰り返したが、それも若さゆえである）。初めてクロスカントリーとい

う競技に出会い、全力で部活に取り組むことの楽しみ、越えられない壁に対する悔しさや己の弱さを知った。初めて恋人ができ、おそらく一生女心は理解ができないということも知った。

今振り返れば、あのときこうしていれば、という後悔の方が多い気はする。今ならもっと上手くできたのに、と、ありもしない妄想をしたりもする。しかし、今、この場の自分があるのはそういった失敗を経験したからである。今、自分の周りに信頼できる仲間ができたのは、そういった失敗を共に乗り越えてくれたからである。そう考えるとやはりこの6年間は私にとって必要な6年であり、間違いなくそこに青春はあった。よく、失敗できるのは学生のときまで、という言葉聞くが本当にそのとおりであると思う。4月からは責任のある医師として働いていかなければならない。きっと様々な困難なことに向かい合っていくことと思うが、学生時代の耳を赤くしてしまうような青春の日々は、そんなときこそ必ず私の力になると思う。

最後に、私の6年間の失敗を支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第38期卒業生 飛 澤 悠 伊



編入生として入学してから早4年半。月日が経つのは早いもので、あっという間に卒業する立場となりました。物心ついた時から将来の夢は医師でしたが、残念ながらバリバリの文系頭脳しか持たない私は夢を諦

め、東京の大学で心理学の勉強をしていました。しかし奇跡というものはあるもので、所属していた研究室の教授が奇跡的にも医師であり、「医者になりたいなら、文系でも受けられる編入試験もあるよ。受けてみたら？」という言葉で教授から奇跡的に聞き、編入試験に挑戦しようと決意しました。大学4年時に受けた試験は見事全滅！現実の厳しさを知りました。大学卒業後3か月、就職もせず死に物狂いで勉強し、なんとか拾って頂きました。こうして奇跡的に受かりはしたものの、血や内臓などの類は超が付くほど苦手な私…この先一体どうなるの？

晴れて10月に編入し、最初に待っていたのは解剖でした。神経？筋肉？血管？こんなにいっ

ぱいあるの？インプットしなければならない情報量が多すぎて、私の頭はパニック状態。半年くらいてんやわんやしていたら、血も内臓も全く平気に！一つ強くなりました。気持ちにもちよっと余裕が出てきたので、3年生からは部活に入りました。前の大学で4年間合唱をしていたので、ここでも続けることを決意。合唱部では素敵な仲間に出会うことも出来たし、パートリーダーをやらせて頂いたり、たくさんの思い出が詰まっています。

のらりくらりと毎日を過ごしていたら、あっという間に6年生。勉強会も増やし、なるべく人と会ってお喋りしながら勉強するようにしました。途中辛くなったこともたくさんありましたが、勉強会のメンバーには国試が終わるまでとても助けられました。そして変なゴロもたくさん生まれました。

1回は諦めた夢でしたが、多くの方々に支えられてここまで来れました。お世話になった皆様には感謝してもしきれないくらいです。本当にありがとうございました！

大学生活で重要なこと

医学科第38期卒業生 竹 内 悠 仁



私が6年間の大学生活で重要だと思ったことは2つです。それは、「目標」と「友達」です。

「目標」は大きいものでも小さいものでも構いません。私の場合は意志が弱いので、小さな短期目標を設定していました。

その時々自分が挑戦してみたいことや、やらなければならないこと等をリストアップしていました。例えば、「溪流釣りに挑戦」「ハーフマラソンに挑戦」「英単語の本を1日2ページ」「講義でわからなかった箇所を復習」など、その時々々の忙しさに応じて無理のない計画を立てることが大事だと思います。小さな目標でも達成出来たということが喜びになり、また新しい目標に繋がっていきました。限られた時間の中で、勉強、部活、アルバイト、趣味など、何をどれだけ頑張るかは何それぞれ違いますが、目標を持って何かに取り組めば後

悔はしないと思います。

楽しいことより辛いことのほうが多かった6年間ですが、そんな時にいつも支えてくれたのが「友達」でした。試験前は共に勉強し、問題を出し合い、励まし合ってきました。私は大学に入る前まで、勉強は結局1人でやるものだと思っていました。しかし、大学のチュートリアルやグループ学習を通じて、自分とは異なる様々な視点や考え方があり、それを知ることで自分の視野をもっと広げることが出来ました。さらに、自分の学んだことを相手にアウトプットすることで、理解が更に深まることを実感しました。国家試験対策は変わったことはせずに、個人学習でインプットしたことを、友達とアウトプットし合うのが良いと思います。

最後になりますが、数多くの学びの機会を与えてくださった旭川医科大学に心から感謝しています。そして、6年間の学生生活を支えてくださった教職員の方々、友達、家族に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

卒業にあたって

看護学科第17期卒業生 垣野純輝



大学の4年間について振り返ってみると本当にあっという間の4年間でした。いまだに自分が卒業だということに実感を持っていません。

私が看護師を目指したのは高校2年生の時の冬からでした。進路を変更したのもかなりぎりぎりでした。きっかけは自分の親族の入院からでした。正直、看護師は職業柄、男性は少なく、女性の職場だと感じていて最初は抵抗があったのですが、親族のお見舞いで病院に通ううちに看護師の存在というのが患者やその家族にとって大きく精神的な支えになっていると感じ、自分もそのような仕事してみたいと思ったからです。

実際に大学に入学してからは自分の知らないことが多く、自分は周りの人よりもできていないと感じることが多くありました。そして、技術的な面でもあまり自信を持っていないことが多くありました。しかし、実習で自分が受け持った

患者さんが元気になっていく姿や患者さんに「あなたが担当でよかったよ。」という声をかけていただいたことで、看護師になると決めたときの自分の目標の患者や家族の気持ちに寄り添える看護師というのを再認識し、今できることを一生懸命やるのが大切でそれは技術ができていなくてもその気持ちは伝えることができると感じました。

また、大学生活では部活動を通じて様々なことを学ぶことができました。一緒に活動してくれる先輩や同期、後輩など一緒に頑張れる人がいてくれたから自分も頑張れたのだと思います。このような辛いときや楽しいときを共有できる仲間がいてくれたから今があるのだと思います。

4月からは看護師として働くことになりませんが、今まで学んできたことをしっかりと生かして働いてからも様々なことを学び、経験して自分の目標とする看護師像に近づけるように努力していきたいです。

卒業にあたって

看護学科第17期卒業生 境綾乃



まだ雪も残る4月の旭川、着慣れないスーツを纏い、期待と不安を抱きながら歩く私に「入学おめでとう！」と人が口々に言います。完全に気圧された私は、顔を赤くしてその場から逃走…今でも鮮明に覚えています。

これが私の大学生活の始まりです。

就職に強いという理由で選んだ看護の道。持前の「なんとかなるだろう」精神で入学したものの、授業が進むほどに看護師として働く自分がイメージできず、未来への不安を抱き1・2年生を過ごしました。しかし3年生の秋、ある先生が「成長は与えられるものではなく獲得するものだ」という言葉をくれました。なんとなく看護学科に入り、課題をこなして過ごしてきた自分にとって、それはとても重みのある言葉でした。それから私はその言葉を胸に実習や授業に取り組み、そしてたくさんの人との出会いや経験を通し、最終的には「保健師」という素

敵な看護職の道を見つけることができました。今はこれから看護職として働く自分を誇らしく思っています。

また部活動でも多くのことを学びました。私はマネージャーとして入部しました。選手にお水をあげて、怪我の手当てをして…と現実はそのような日々ばかりではなく、組織の一員として自分には何が求められているのか、部を運営するために何が必要で自分には何ができるかを考える機会が多くありました。部活動を通して社会勉強ができ、大変貴重な経験をさせてもらったことを嬉しく思っています。

4年間を振り返って、真っ先に思いつく言葉は「感謝」です。授業や演習でお世話になった先生方をはじめ、実習先の指導者や病棟スタッフの皆様、部活動を通して関わった方々、そして22年間支え続けてくれた両親、これまで自分に関わってくれた全ての方々に、今一度ありがとうございましたと伝えたいです。これからも自分なりの成長を意識し、看護職者として社会に貢献できるよう努力したいと思います。

卒業にあたって

看護学科第17期卒業生 佐藤 美幸



旭川医科大学に入学してあつという間に4年という月日が経ち、ついに卒業の時が来ました。私にとって4年間は本当にあつという間で、卒業と言われてもあまりピンと来ていないのが正直なところです。

私は中学生の時から看護師という職業に興味を持ち、高校生時代に体験した東日本大震災をきっかけにさらに看護師になりたいという気持ちが強くなりました。そんな気持ちを抱きながら旭川医科大学に入学しましたが、実際に学んでいく中で看護師になるということがどんなに大変であるかを実感しました。実習などでは実際に患者さんと接し、その人にはどんな看護が必要なのかを先生や同じグループの友人からアドバイスを貰いながら夜遅くまで考えることもありました。しかし困難を感じると同時に自分

が考えた看護が患者さんにとって良い看護で「ありがとう」などの言葉をいただいたときには頑張って考えてよかったと思い、看護への自信にもつながっていきました。このように大学での勉強や実習で私は、看護師としての困難と看護師の魅力や楽しさを感じる事が出来ました。

また、勉強や実習以外にも部活動への参加、友人と遊んだり、旅行に出掛けたりとたくさんの思い出があります。勉学で悩んだとき、プライベートで悩んだとき、困った時、自分のことのように考えてくれて励ましてくれる友人がいたからこそ挫折することなく4年間の大学生活を充実したものにできたのだと思います。

これから社会人として大変なことがたくさんあると思います。未熟で悩むことも挫折しそうになるときもあると思います。しかし、そんな時にはこの大学で学んできたこと、得たことを活かして乗り越えていきたいと思っています。

卒業にあたって

看護学科第17期卒業生 橋 尚子



入学してからあつという間に4年が経ちました。4月からは社会人となるのですが、未だ信じられず実感がありません。

1年時には看護師になるつもりで入学し実習を重ねていましたが、時には大学院に進学しようかと自分の進路がなかなか定まらずに過ごしていました。しかし、ある講義をきっかけに助産師の道に進みたいと強く思い、3年時に助産専攻し現在に至ります。本格的に助産師の講義等が開始したのは4年になった時でした。看護師と助産師の講義と実習を同時にこなすのは、とても大変でした。看護師の講義等のみでも分からないことが多く、それに加えて助産師の勉強はついていけないと不安ばかりが大きくなった時期もありました。また、長期休暇も助産実習で毎日病院に通っている時には、自分の将来の為であるにも関わらず辛さのあまり泣きながら帰宅した記憶があります。しかし、私にとってこの1年間で最も充実しており、助産学の先生方や共に頑張ってきた助産専

攻した2人、妊産婦さん、助産師さんとの関わりの中で、助産師の魅力ややりがい、助産師としてだけではなく人として心に留めておくべき大切なものを学び感じる事ができました。助産専攻した数少ない者として、少しでも多くの後輩達に助産師の魅力を知ってもらいその道に進んで欲しいと思います。

また、部活動ではアイスホッケー部に所属しマネージャーをしていました。先輩や同期、後輩と共に年末に行われる東医体での優勝という目標に向かって努力するという事は、高校生活に部活動をしてこなかった私にはとても大きな財産になりました。ここで出逢った一つひとつが、かけがえのないものに感じている今、この繋がりをずっと大切に過ごしていきたいと思っています。

4月からは旭川市内の産婦人科病院で助産師として働くことになりました。少しずつでも理想としている助産師に近づけるように努力を重ねていきたいと思っています。最後になりますが、4年間ご指導頂いた先生方、支えて下さった家族や友人に感謝致します。本当にありがとうございました。



糖尿病学と共に歩んだ40年

内科学分野 病態代謝内科学分野

名誉教授 羽田 勝 計

2016年3月末をもちまして、定年退職を迎えることになりました。2003年12月1日付で、旭川医科大学内科学第二講座の第三代目教授として赴任し、12年4か月間勤めさせて頂きました。私の専門は糖尿病であり、その中でも糖尿病性腎症をテーマとして活動してまいりました。ただ、最初から腎症を専門にしていたわけではありません。今回、過去を振り返ることで退職のご挨拶に代えさせて頂きたいと考えております。

私達の世代は、所謂学園紛争の最後の世代であり、種々の事柄が存在しました。まず、高校卒業時には、東大紛争のため東京大学の入学試験が中止となりました。翌年、大阪大学医学部に入学しましたが、すぐに国立大学授業料値上げ反対のストライキに入りました。1976年に卒業しましたが、卒業時に、「入局拒否・臨床系大学院ボイコット」のクラス決議をしました。ただ翌年の卒業生が、「何でもあり」というクラス決議をしたため、私達の決議はその時点で白紙撤回されたことになりました。今となっては懐かしい思い出ですが、当時は青年医師連合（青医連）の活動家だった同級生が旗振り役で、私達ノンポリは「まあいいか」という雰囲気でした。

大阪で2年間研修した後、滋賀医科大学内科学第三講座に赴任しました。滋賀医科大学は旭川医科大学より2年遅れて開校した新設医科大学で、現在単科の旧国立医科大学としては、浜松医科大学を加えた3校のみが残っています。ここで、糖尿病の診療・研究を開始しました。最初は、豚ランゲルハンス島・インスリノーマ細胞を用いたインスリン・グルカゴン分泌機構の検討が主要テーマで、この研究を2年ほど行った後、1980年に米国シカゴ大学に留学しました。シカゴ大学には、生化学にプロインスリンを発見したSteiner教授、内科にC-ペプチドの測定を開発したRubenstein教授がおられ、2人の下で、糖尿病に関するいくつかの研究を行

いました。特に後半には、高インスリン血症を呈する糖尿病家系のインスリン遺伝子の解析を行い、異常インスリンの同定を行うことができました。この研究は高く評価され、米国の学会で発表すると共に、所謂有名な雑誌にも掲載することができました。

しかし、1983年に帰国すると、滋賀医科大学内科学第三講座の研究テーマが糖尿病合併症に大きくシフトしていました。その時点で、私のテーマはインスリンから糖尿病性腎症に変わり、糖尿病と共に腎臓病の診療も担当することになりました。現在とは異なり、糖尿病性腎症からの透析療法導入は全体の約15%程度に過ぎず、慢性糸球体腎炎全盛期の時代でした。このため、幸か不幸か糖尿病性腎症の研究者は少なく、また病理学的研究がその主体でした。生化学的手法を糖尿病性腎症の研究に導入したのは、日本では恐らく私達が最初であったと思います。この意味でも、インスリンを中心とした、分子生物学的研究手法が役に立ったと考えています。

旭川医科大学へ赴任し、腎症を中心とした糖尿病研究を続けることと致しました。幸い、多くの若手研究者に恵まれ、基礎・臨床共に種々の成績を発表することができました。また途中からは、インクレチン関連薬が上梓され、インスリン・グルカゴンに関する研究も手掛けることができました。糖尿病性腎症は1998年から透析療法導入原疾患の第1位となっておりますが、ここ数年は横ばいとなり、近い将来は減少すると期待されています。私達の研究が、この一助となっておれば喜ばしい限りです。

私自身は、約40年間、自分が面白いと感じたことを続けてまいりました。若手の先生方も、是非ご自分が面白いと感じられる研究を継続して頂きたいと願っております。

これまで支えて頂いた多くの方々に感謝申し上げますと共に、旭川医科大学の益々の発展を祈念して、退職の挨拶としたいと思います。



定年退職に当たって

歯科口腔外科学講座

名誉教授 松田光悦

平成28年3月31日をもちまして定年退職となります。昭和55年4月、大学卒業と同時に旭川医科大学付属病院歯科口腔外科にお世話になりました。以来、他病院への出向、留学などで2年10ヶ月ほど本学を離れた時期がありましたが、ほぼ34年間、旭川医科大学で勤務させていただきました。平成16年10月からは歯科口腔外科学講座の第二代目教授として勤めさせて頂き、その間、教育・研究・臨床の活動に加えて、平成24年からは運営担当副病院長として入退院センター長や地域連携室長などをさせて頂きながら多くの先生方、看護師や各医療職そして事務の皆様のご協力とご支援を頂き、何とか職務を遂行させて頂きましたことに心より感謝申し上げます。

私が歯科医師として口腔外科を研修し始めた昭和55年当時は、全国的に口腔外科という診療科の知名度が低く、当時の新設医科大学付属病院にようやく診療科が設置された時期でありました。歯科医師が、手術室において全身麻酔下の手術を行い、病棟での入院管理を行うということが、周囲には珍しいことであったと思います。口腔外科の診療をポピュラーなものにするために、初代北進一名誉教授の指導の下、院内各科、各部署と円滑な連携をさせて頂き、またいろいろ学ばせて頂き今日に至っております。この間、口腔外科専門医を取得する若手歯科医師が多く育ってきましたが、これは当科での教育だけでなく、各診療科医師、看護師をはじめ各医療職の皆様が、当院の若手歯科医師を厳しくも暖かく育てて頂きましたお陰と思い、

感謝致しております。

学生教育におきましては、医学部学生への歯科医学教育はどうあるべきかが、常に課題でありました。我が国における医学部教育と歯学部教育は、いわゆる医歯二元論といわれ、医学部と歯学部で別個の教育体制が取られています。そのため「口腔」という組織、臓器が人体の中から切り離された形で教育されてきました。口腔に関する教育の主体は歯学部ということになっておりますが、現実として歯学教育の大半は「歯」に集中しており、また医学部では、基礎、臨床を通して、ごく一部の教育でしかありません。将来医師となる医学部学生には、人間生活の基本であり、生きるための日常である「食べる」「しゃべる」という機能をしっかり学んでもらいたいという一心で講義、実習を行って参りました。医療には「命を救う医療」と「生活を守る医療」があるといわれており、口腔の機能を診ることはすなわち「患者の日常を回復させる」ことに繋がり、旭川医科大学の卒業生は患者の命を救ったあと、その患者が日常生活に戻るまで医療を続ける医師になって欲しいとの願いがありました。

また毎年学生を連れて、麻酔医、看護師と共に旭川医大チームを結成し、ベトナム社会主義共和国における、口唇口蓋裂のボランティア手術活動に参加させて頂いたことも楽しい思い出となっており、今後も続けたいと思っております。

大学の管理運営に関しましては、平成24年4月から旭川医大病院の運営担当副病院長を命ぜ

られ約4年間努めさせて頂きました。その間、平成26年初頭から病院機能評価訪問審査受診のためのチームリーダーを務めることとなり、平成27年1月29日（木）、30日（金）の病院機能評価訪問審査まで気の抜けない日々が続いたことを思い出します。このとき受審した機能評価は第三世代Ver.1.0というもので、これまでとは評価体系が大きく変更されており、特に大きく変わった点は、症例トレース型ケアプロセスという評価領域が導入され、「患者の視点に立った良質な医療が実践されているか」を評価されるということでした。執行部の皆様並びに関係職員の皆様のご指導、ご協力のもと無事終了することが出来、改めて感謝申し上げます。

今、我が国は超高齢社会となり、地域医療構想と相まって医療は大きく変化していこうとしております。旭川医科大学ならびに旭川医科大学病院は、この地域において、地域住民の「命を救い、生活を守る」医療を真摯に展開し、そのための医療人をしっかりと育てることが使命と思っております。その結果、地域に根ざし、世の中のリーダーシップを取っていく大学、大学病院に発展していくものと信じております。今後のますますのご健闘、ご活躍を祈念いたします。長いことお世話になりありがとうございます。





退職にあたって

名誉教授 岡田 洋子

看護学科開設と同時の、平成8年4月から平成28年3月までの長きに渡って、お世話になりました。着任当初は毎日「この先、何年勤めるか…?」といった心境で仕事をしておりました。振り返りますと19年間に！我ながら驚いています。

ところで、2014年（平成26年）12月19日（金）の朝日新聞朝刊に、このような記事が掲載されていました。皆さんは議会運営派それとも市議会派？

山形・酒田市

咽喉がんの手術で声帯を失った山形県酒田市の本間正己市長（67歳）に対し、「声が聞き取りづらい」ことなどを理由に議会運営委員会が辞職勧告決議案を検討するよう求めた。他の会派が反対し、提案されることはなかったが「とんでもない差別意識」と批判の声が上がった。

議会運営委員会の辞職勧告提出の主な理由：

- 1 「市民の間に『公務が可能なのか』という意見が大きい」「情緒的ではなく酒田市にとってどうなのか、市民のためになるのかで判断すべきだ」という意見。
2. 市長になって2年ちょっとの間に3度も入院しており、健康を不安視する市民が少なくない。
3. 議員の一人は「最初聞きづらかったが、本間市長が人工声帯を上手に使うようになった。こちらも慣れてきた。」
4. その後、健康上の問題はみられなかった。

一方、市議会関係者の声：

1. 「集中しないと分かりにくい。しゃべり方が悪い」「しゃべり方が遅い」と議事進行に一定の影響を認めたとうえで、「市長も病気になりたくてなったのではない。」
2. 聞き取りづらいのなら、プロジェクター

で文字を起こすといった工夫もできる」と指摘した。



チングルマとアオノツガザクラ

声を失った市長 公務できぬ？

議会運営派：「聞きづらい」と辞職要請

結論：「あからさまな差別」と批判を受けて謝罪

看護師あるいは保健師・助産師を目指して看護学科に入学された皆さん、学びの途上にある在校生の皆さん、看護に正解・不正解が前もって有るのではなく、一人一人異なる対象にとって何がベストかを考え側面から支援することが大切な役割になります。

大学での学習方法は暗記・覚えることではなく、考えることです。

さらに、自分の考えを分かりやすく相手に伝えたりプレゼンできる能力です。

皆さんのご健闘を祈ります。

平成27年度定年退職教授による最終講義が行われました

平成28年3月31日をもって定年退職された先生方の最終講義が、平成28年3月に行われました。この度ご退職されたのは、内科学講座 病態代謝内科学分野 羽田勝計教授、歯科口腔外科学講座 松田光悦教授、看護学講座 岡田洋子教授の3名です。各講義とも本学学生や教職員のほか、大学関係者などが多数出席し、それぞれの最終講義を熱心に聴講し、思い出深い最終講義となりました。

3名の先生方のこれまでのご尽力に、学生、教職員、卒業生一同心から感謝するとともに、今後のご健勝と益々のご活躍をお祈りいたします。

《羽田 勝計教授》

平成28年3月15日（火）15時30分から大講義室において、内科学講座 病態代謝内科学分野 羽田勝計教授の最終講義が行われました。羽田教授は、滋賀医科大学附属病院講師を経て、平成15年12月に本学内科学第二講座（現 内科学講座病態代謝内科学分野）教授として着任されました。最終講義では、『糖尿病学：奥深さと面白さ』というタイトルで、滋賀医科大学や米国シカゴ大学での経験や、旭川医科大学での糖尿病性腎症をテーマとした研究活動についてお話いただきました。最後に、「若い先生方には、是非、自分が面白いと感じられる研究を続けてもらいたい。」とのメッセージが伝えられました。



《松田 光悦 教授》

歯科口腔外科学講座 松田光悦教授の最終講義が、3月10日（木）15時から大講義室において行われました。松田教授は、昭和61年10月に本学歯科口腔外科学講座の助手として着任され、その後、平成13年に同講座助教授、平成16年には同講座教授に就任されました。また、平成24年4月からは旭川医科大学病院副病院長（病院運営担当）を努められ、大学病院の運営にもご尽力されました。最終講義では、『医学部における歯科口腔外科学—口は何のためにあるか—』と題して、本学での

講義を振り返るとともに、「食べること」「しゃべること」は人間の生活の中心であり、歯科医療は「生きる力を支える医療」であるということをお話いただきました。また、毎年学生もチームの一員として参加している、ベトナム社会主義共和国における口唇口蓋裂のボランティア手術活動の思い出も語っていただきました。



《岡田 洋子教授》

3月1日(火)17時から大講義室において、看護学講座 岡田洋子教授が最終講義を行いました。岡田教授は、北海道大学医学部附属病院で看護師としてご活躍され、その後天使女子短期大学衛生看護学科で教員として勤務された後、平成8年4月に本学看護学科の開設と同時に、本学教授に就任されました。最終講義は、『私と看護学教育』というタイトルで、先生が看護への道を目指したきっかけや、聖路加看護大学での学び、そしてDeath Educationに関する研究活動についてご講義いただきました。



平成27年度 学位記授与式

平成28年3月25日（金）10時30分から、本学体育館において平成27年度学位記授与式が行われ、医学科128名、看護学科60名、博士課程9名、論文博士4名、修士課程10名にそれぞれ学位記が授与されました。

卒業生は、本学の室内合奏団の演奏がBGMで奏でられるなか入場し、その後、一人ひとり学位記を手渡され、吉田学長と固く握手を交わしました。学長告辞では、卒業生の新たな挑戦・旅立ちに対して激励のメッセージが送られました。

また、12時30分からは、本学学生食堂において祝賀会が行われ、医学科・看護学科卒業生のそれぞれの学年担当教員や各同窓会長からの祝辞、在校生代表からの送辞が述べられ、卒業生の代表も謝辞として、大学生活を振り返り、また、新社会人としての抱負を披露していました。



学業成績優秀者に対する学生表彰を行いました

平成28年3月25日（金）学位記授与式終了後の12時30分から、本学小講堂において役員及び学長補佐、そして学生のご家族のご列席のもと、学業成績優秀者に対する学生表彰が実施されました。

本表彰は、本学学生表彰規程に基づく表彰で、在学期間を通じて極めて優秀な学業成績を取めた者に対して授与されるものです。

今回表彰された4名は、医学科 山村 日向子さん、井浦 孝紀さんと、看護学科 林 愛里さん、寺岡 綾香さんです。表彰式では、学長から一人一人に木彫りの表彰楯が授与されました。



卒業生の動向（医学科）

平成28年3月25日（金）に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。

なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

（学生支援課）

区 分		大学及び病院名等	平成27年度卒業生		
			男	女	計
進 学	小 計		0	0	0
就 職	道 内	本院（旭川医科大学病院）	32	9	41
		北海道大学病院	2	0	2
		その他	39	19	58
		計	73	28	101
	道 外	岐阜大学病院	0	1	1
		その他	14	1	15
		計	14	2	16
	小 計		87	30	117
未 定・その他			8	3	11
合 計			95	33	128

上記以外の病院名

道 内 ： 旭川医療センター、市立旭川病院、旭川赤十字病院、旭川厚生病院
 北海道医療センター、斗南病院、札幌医科大学病院、市立札幌病院、札幌厚生
 病院、手稲溪仁会病院、勤医協中央病院、市立稚内病院、名寄市立総合病院、
 留萌市立病院、富良野病院、滝川市立病院、深川市立病院、砂川市立病院、北
 見赤十字病院、帯広第一病院、日鋼記念病院、八雲総合病院、市立函館病院、
 函館五稜郭病院

道 外 ： 自治医科大学附属埼玉埼玉医療センター、獨協医科大学越谷病院、茨城県立中
 央病院、日立総合病院、東京医療センター、湘南鎌倉総合病院、藤沢湘南台病
 院、菊名記念病院、長野中央病院、聖隷浜松病院、海南病院、岸和田徳洲会病
 院、大津市民病院、市立敦賀病院、大津市民病院、兵庫県立淡路医療センター

卒業生の動向（看護学科）

平成28年3月25日（金）に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。

なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

（学生支援課）

区 分		大学及び病院名等	平成27年度卒業生			
			男	女	計	
進 学	道 内	道立旭川高等看護学院	0	2	2	
	小 計		0	2	2	
就 職	道 内	本院（旭川医科大学病院）	1	35	36	
		北海道大学病院	0	1	1	
		帯広病院	1	0	1	
		その他	0	3	3	
		保健師	2	5	7	
		助産師	本院（旭川医科大学病院）	0	2	2
			その他	0	1	1
	計	4	47	51		
	道 外	看護師	千葉大学医学部附属病院	0	1	1
			その他	2	4	6
		保健師	0	0	0	
		助産師	0	0	0	
		計	2	5	7	
	小 計		6	52	58	
未 定・その他			0	0	0	
合 計			6	54	60	

上記以外の病院名

道 内 ：手稲溪仁会病院、NTT東日本札幌病院、イムス札幌消化器中央総合病院
稚内市、富良野市、南富良野町、奈井江町、雄武町、佐呂間町、倶知安町
森産婦人科病院

道 外 ：岩手県立中部病院、東邦大学医療センター大森病院、埼玉医科大学総合医療セ
ンター、鎌ヶ谷総合病院、東名厚木病院、横浜市立大学附属病院

課外活動に対する学生表彰を行いました

平成28年4月12日（火）午後12時10分から、本学第一会議室において、課外活動で特に顕著な成果をあげた学生及び学生団体に対する学生表彰が行われました。

表彰式は、役員及び顧問教員の列席のもと、吉田学長から3団体、個人4名に対し表彰状の授与と記念品の贈呈が行われ、被表彰者の栄誉を称えるとともに、更なる活躍のための激励の言葉が贈られました。受賞者の一覧は以下のとおりです。

=課外活動による表彰=

団体名・氏名	大会等名	成績
弓道部女子	第61回全道学生弓道女子争覇戦 女子の部 団体戦I部リーグ	準優勝
空手道部男子	第58回東日本医科学生総合体育大会 男子団体 組手競技	準優勝
	第49回和道流空手道全道大会 組手団体一般・大学 男子の部	優勝
空手道部女子	第49回和道流空手道全道大会 組手団体一般・大学 女子の部	準優勝
医学科第6学年 阿部 洋章 (弓道部)	第58回東日本医科学生総合体育大会 弓道競技 男子個人	準優勝
医学科第2学年 有馬 涼太 (空手道部)	第49回和道流空手道全道大会 一般・大学男子の部 個人組手	準優勝
医学科第3学年 成瀬 早紀 (空手道部)	第58回東日本医科学生総合体育大会 女子個人形	準優勝
	第49回和道流空手道全道大会 一般・大学女子の部 個人形	優勝
看護学科第4学年 小林 早紀 (空手道部)	第49回和道流空手道全道大会 一般・大学女子の部 個人組手	3位



模擬患者を自学養成しています

本学では、平成23年より教育センターを中心に模擬患者を自学養成しています。

模擬患者とは、医療系学生や医療従事者のコミュニケーション教育において、「生きた教材として患者役を演ずる人」のことを言います。例えるなら、患者役を演じる役者さんで、学生は模擬患者さんを相手に、コミュニケーションのトレーニングを行います。

主な活動としては、医学科1学年「心理コミュニケーション実習」や4学年の臨床実習開始前に行う医療面接、初期研修医対象の医療面接勉強会での患者役、看護学科2学年「看護過程論」や3学年「実践看護技術学Ⅰ」での入院患者役などを担当していただいています。

現在、模擬患者を追加募集しています。教育センター主催の模擬患者養成講習会がありますので、受講の後、模擬患者さんとしてデビューしていただきます。

興味のある方は、教育センター

(電話；0166-68-2871、e-mail；educ@asahikawa-med.ac.jp)までご連絡ください。

なお、誠に勝手ながら、お申し込みは、旭川市内または旭川近郊の方に限らせて頂きます。



安否確認システムについて

本学では、危機管理体制の強化を図ることを目的として、地震等の発生又は災害による大規模な被害が予想される場合に、学生及び教職員の安否状況を迅速に把握し、災害時の安全確認を速やかに行うための一手段として、安否確認システムを導入しています。

すでに学生の皆さんには、ガイダンスやメール等で、登録をお願いしているところですが、まだ登録が済んでいない場合には、速やかに登録するようにしてください。

なお、災害発生時の安否確認メールに対し、学生から返信があった場合には、保護者の方にもメールが転送される仕組みになっておりますので、保護者の方につきましても、携帯の迷惑メール対策で指定受信設定をされている際は、@anpi.mailds.jp及び@asahikawa-med.ac.jpのドメイン指定受信設定をされるようお願いいたします。

1. サービス概要

災害が発生すると、次の手順にて学生及び教職員の安否確認が実施されます。

- ①災害発生後、本学から安否を確認するメールが送信される。
- ②携帯電話メールアドレスに①で送信された『安否確認メール』が届く。
- ③自分の安否状況をメールを利用して報告する。
- ④本学からの安否確認メールに返信した場合、保護者にも返信したメールが転送されます。

2. 登録方法について

「安否確認サービス」は個人所有の携帯電話の電子メールを活用することを基本とします。メールアドレス等の登録は各自で行ってください。

詳細は次のログインページに記載されています。

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/bureau/shomu/local/anpi/>

夏季休業中における事故防止について

7月下旬からは、待ちに待った夏季休業が始まります。海やキャンプ、アルバイトや帰省と楽しい計画を色々と立てている方も多いことでしょう。開放的な気分となるこの時期は、交通事故をはじめ各種の事故や事件が多発することが懸念されます。

また、万が一、事故等が発生した場合には、皆さんが医療職者を目指す学生であるという立場からも、より厳しい批判を受けるという事態となることを十分認識し、節度を持った行動をとるように注意し、有意義な夏季休業を過ごしてください。

1. 交通事故について

- 1) 長距離・長時間の無理な運転にならないよう、2時間ごとに1回以上の休憩をとるようにしましょう。
- 2) シートベルトを必ず着用し、速度の出し過ぎや無理な追い越しなどに注意しましょう。

2. 飲酒運転の禁止

飲酒運転は悪質な犯罪であるとの認識をしっかりと持ち、二日酔い運転を含めた飲酒運転を根絶しましょう。飲酒した人の車に同乗したり、車を運転する可能性がある人への酒類の提供や車の提供も犯罪となります。

3. イッキ飲み・アルハラの禁止

- 1) 未成年者の飲酒は厳禁
- 2) 体質的にアルコールを受け付けない人に飲酒を勧めない
- 3) 酒に強いと過信して多量のアルコール摂取はしない
- 4) イッキ飲み等の危険な飲酒はしない、させない
- 5) 自動車・バイク・自転車を運転する予定の人は飲酒しない、させない

4. 山岳・水難事故防止について

- 1) 出掛ける前に天気や海川の情報をチェックし、悪天候が予想されている時は、無理をせず中止・延期を検討しましょう。
- 2) 健康状態が悪い時や飲酒後の活動は危険ですので、絶対にやめましょう。
- 3) 危険な場所をよく確認し、近づかないようにしましょう。
- 4) 登山計画を立てた際は、登山計画書を警察署等に提出するとともに、学生支援課にも写しを提出してください。

5. 薬物乱用の禁止

昨今「危険ドラッグ」の乱用は大きな社会問題となっています。好奇心や誘惑から、薬物（ドラッグ）を買わない、使わない、かかわらないという強い意思を持ってください。

※夏季休業中に事件・事故が発生した場合の連絡先

学生支援課学生総務係 (0166-68-2208) 【土日祝日を除く 8:30~17:15】

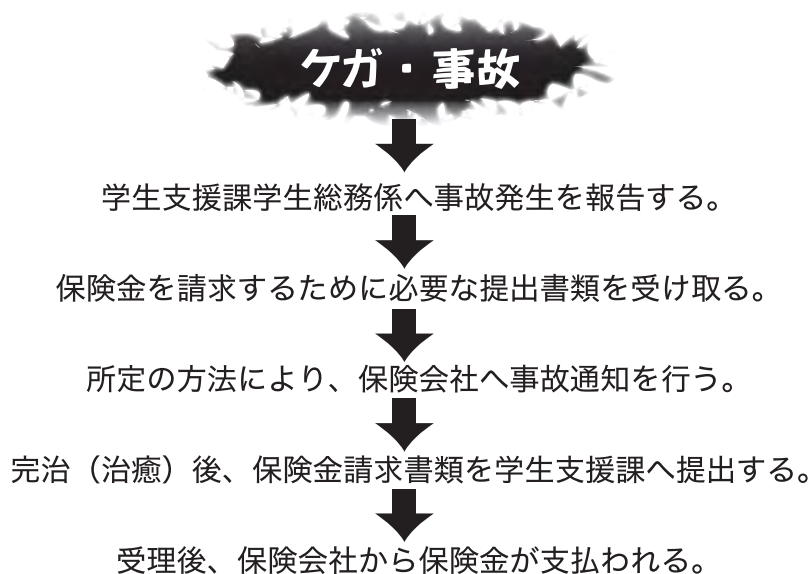
各種保険について

学生の皆さんには、入学時に各種保険に加入を義務付けており、教育研究活動中に事故が起こった場合や怪我をした場合に、保険金の給付が受けられるようになっています。

学科によって、また、任意保険に加入しているかどうかによって、補償の範囲は異なりますが、正課中、学校行事中、課外活動中及び通学中において、学生本人が身体に傷害を被った時、また、他人を負傷させたり、他人の物を壊したりしたことにより被る法律上の損害賠償等が補償されますので、事故等が起こった時には、速やかに学生支援課学生総務係へ連絡してください。

なお、事故等が発生した場合は、学年担当教員や実習先の指導者、学生団体の顧問教員及び学生支援課に事故の状況を報告してください。

基本的な保険請求手続きは、以下のとおりです。



課外活動物品の貸出について

大学では、皆さんの課外活動のために必要な物品を貸出し、活動を側面から援助しています。

キャンプ用品や運動用具類、音響機器類等を貸出していますので、借用を希望する方は福利厚生施設1階理髪室隣の管理室までお越しください。

なお、原則、貸出の事前予約は行っておりません。



※ 6月から開室時間が変更になりました。
～開室時間～
月・水・金曜日（祝日を除く。）
16：45～17：30

◎保健管理センターの開所時間

9:00～16:30（土・日・祝日及び春季、夏季、冬季学生休業期間は閉所）

◎健康相談日（定期健診が行われる日は閉所します。緊急時に対応します）

主な相談内容	相談医等		定期相談日	相談時間
内科・外科	第二外科 医師	高橋 裕之	毎週木曜日	12時～14時
内科	第一内科 医師	中川 直樹	毎週月曜日	
	第三内科 医師	笹島 順平	毎週水曜日	
	第二内科 医師	藤田 征弘	毎週金曜日	
*精神神経科	精神神経科 医師	田村 義之	毎月2回	
*整形外科	整形外科 医師	丹代 晋	毎月第1・3月曜日	
*皮膚科	皮膚科 医師	岩崎 剛志	毎月1回	
*泌尿器科	泌尿器科 医師	北 雅史	毎月1回	
*眼科	眼科 医師	木ノ内 玲子 川井 基史	毎月2回	
*耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科 医師	上田 征吾	毎月1回	
*婦人科	産科婦人科 医師	吉澤 明希子	毎月1回	
*歯科	歯科口腔外科 歯科医師	佐藤 栄晃	毎月1回	
健康相談全般	保健管理センター長 川村 祐一郎		原則として毎週火曜日昼休み 緊急の場合にはそれ以外でも可	

（注）*印の付いている科の診察希望の場合は、前日までの予約が必要です。

（整形外科以外は相談日が未定のため、相談依頼により対応します。）

定期相談日等は、都合により変更することがありますが、その都度お知らせします。

保健管理センターを受診する時に、保険証は必要ありません。他医療機関を受診する場合に必要となるため、必ず用意しておきましょう



体温計は、ありますか？
健康管理のために、
用意しておきましょう！！



教 員 の 異 動

平成28年3月31日	定年退職	医学部内科学講座（病態代謝内科学分野）	教授	羽田勝計
平成28年3月31日	定年退職	医学部歯科口腔外科学講座	教授	松田光悦
平成28年3月31日	定年退職	医学部看護学講座	教授	岡田洋子
平成28年3月31日	退職	医学部麻酔・蘇生学講座	准教授	高畑治
平成28年3月31日	退職	病院第二外科	講師	小原啓
平成28年3月31日	退職	医学部整形外科科学講座	講師	能地仁
平成28年3月31日	退職	病院整形外科	講師	研谷智
平成28年3月31日	退職	病院眼科	講師	高橋淳士
平成28年3月31日	退職	病院経営企画部	講師	谷川琢海
平成28年4月1日	昇任	医学部病理学講座（腫瘍病理分野）	講師	山本雅大
平成28年4月1日	昇任	病院外科（消化器）	講師	今井浩二
平成28年4月1日	昇任	医学部整形外科科学講座	講師	谷野弘昌
平成28年4月1日	昇任	病院整形外科	講師	丹代晋
平成28年4月1日	昇任	病院眼科	講師	川井基史
平成28年4月1日	採用	医学部脳神経外科学講座	准教授	露口尚弘
平成28年4月1日	採用	医学部社会学	講師	工藤直志
平成28年4月1日	採用	病院経営企画部	講師	谷祐児
平成28年4月1日	配置換	病院臨床研究支援センター	講師	松本成史
平成28年4月1日	配置換	医学部麻酔・蘇生学講座	講師	笹川智貴
平成28年4月1日	配置換	病院脳神経外科	講師	和田始
平成28年4月30日	退職	教育研究推進センター	准教授	高橋寿明
平成28年5月31日	退職	医学部健康科学講座	講師	杉岡良彦

今後のスケジュール

7月1日（金）	解剖体慰霊式
7月9日（土）	医学科卒業時O S C E
7月27日（水）	オープンキャンパス
7月2日（金）～23日（土）	第63回（平成28年度）北海道地区大学体育大会

7月2日（土）・3日（日）	ハンドボール大会（小樽商科大学体育館）
7月3日（日）	剣道大会（帯広の森体育館）
7月9日（土）～11日（月）	硬式野球大会（北海道大学野球場）
7月9日（土）・10日（日）	バレーボール大会（室蘭工業大学体育館）
7月16日（土）～18日（祝）	バスケットボール大会（忠和公園体育館）
7月16日（土）	弓道大会（留辺蘂町弓道館及び体育館）
7月23日（土）	バドミントン大会（旭川市総合体育大会）

夏季休業

医学科第1学年	7月18日（月）～8月23日（火）
医学科第2・3学年	7月18日（月）～8月19日（金）
医学科第4学年	7月22日（金）～8月19日（金）
医学科第5学年	8月1日（月）～8月19日（金）
医学科第6学年	7月11日（月）～8月31日（水）
看護学科第1学年	7月11日（月）～8月15日（月）
看護学科第2学年	7月11日（月）～8月19日（金）
看護学科第3学年	7月18日（月）～8月15日（月）
看護学科第4学年	7月18日（月）～8月12日（金）



平成27年度「学生の学習・生活実態調査」結果について

本学では、平成27年度在籍の学部学生を対象に、「学生の学習・生活実態調査」を8月～10月にかけて実施し、643名から回答を得ることができました。アンケート調査に回答いただいた学生の皆さんに感謝申し上げます。

この調査は、本学学生の学習に関する態度と意識を把握し、現行カリキュラム及び授業改善を目的とした学習実態調査と、学生の生活実態や本学に対する要望などを把握し、本学の学生生活支援及び施設等の更なる充実を図るための基礎資料を得ることを目的とした生活実態調査として実施しました。今回の調査結果を受けて、大学として対応可能な事項については、検討し順次改善に取り組んでいきたいと考えております。

調査結果は、本学ホームページ

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=campus+finishing> に掲載しております。